



オジロビタキとニシオジロビタキって何? ー分類からおさえよう

オジロビタキは、かつて *Ficedula parva* という種があり、それが2つの亜種に分類されていました。主にヨーロッパに生息する亜種ニシオジロビタキ *F. p. parva* と、ユーラシア大陸の東部に生息する亜種オジロビタキ *F. p. albicilla* です。日本には亜種オジロビタキ *F. p. albicilla* が渡来しているとされていましたが、は亜種ニシオジロビタキ *F. p. parva* も一部渡来していると言われていました。

ところが近年の研究の結果、この2亜種は成鳥の羽衣になる齢やさえずりが異なるから、やはり別種とするのが適切だとされました。それを受けて日本鳥類目録改訂第7版(2012)

では、日本にはオジロビタキ *F. albicilla*(元の亜種オジロビタキ *F. p. albicilla*)が渡来しており、ニシオジロビタキ *F. parva*(元の亜種 *F. p. parva*)は渡来しているか記録を検討中と区分されました。

このため、以前は簡単に「オジロビタキ(*albicilla* または *parva*)を見た」と言えたのですが、現在は以前の亜種レベルの識別をしないと、「オジロビタキ(*albicilla*)を見た」と言えなくなりました。

ところが、問題があります。

①渡来記録が多い年齢である第1回冬羽の時点では、この2種の識別が非常に難しい。

②正式には認められていないものの、ニシオジロビタキ *parva* も時折渡来しているらしい。

このため、安易に「記録があるのはオジロビタキ。だから今回もオジロビタキ」とは言えないのです。



▲オジロビタキ 第1回冬羽 2012.2.10 PHOTO◎川崎彰

嘴がほぼ全て黒いこと、最長上尾筒が黒いことから、この個体はオジロビタキ *albicilla* で良いと思います(筆者岩田の見解)。

渡来記録

四国では、1986年4月に徳島県阿南市伊島^{*1}、1991年12月に高知県高知市での記録^{*2}があります。

香川県では、1984年の2、3月に琴平町琴平山、1994年3月には高松市栗林公園で記録があります^{*3}が、栗林公園の個体は前年12月から情報はあったようです^{*4}。以後は1999年栗林公園^{*5}、2006年峰山^{*6}と続き、近年は主に峰山で、ほぼ毎冬観察されています。

さて、以上の記録のうち、2006年の個体だけは高松市の第1回冬羽の個体(2006.3.26撮影)は、ニシオジロビタキと識別されています^{*7}が、それ以外は全て「オジロビタキ」という「種」の記録です。当時は亜種で分類されていたので、あまりオジロビタキかニシオジロかを検討する必要はなかったのです。

ところが今冬、各地でニシオジロではないか、という個体が見つかっています。「もしそうなら、通常渡来しているというオジロビタキではない珍しい鳥だ」ということで、ちょっとした話題になっているようです。

ただ前述のとおり、実際には、これまではそもそも詳しく識別すらしていなかったのです。

識別ではきる?

さて、問題となる第1回冬羽について、大西氏がコンパクトに整理しています^{*8}。手持ちのヨーロッパの図鑑や資料をいくつか見ましたが、同じ識別点しか掲載してませんでした。

	オジロビタキ <i>albicilla</i>	ニシオジロビタキ <i>parva</i>
嘴	上・下嘴ともに黒い	下嘴の基部は淡色
体色	より暗色	より暖かみがある
喉	白く、灰褐色の胸とのコントラストがある	胸はバフ色味が強く、淡色の喉とのコントラストは弱い。
最長上尾筒	漆黒色(jetblack)で中央尾羽より濃い	黒いものもいるが、通常は灰黒色味や褐色味を帯び、中央尾羽より淡い

一見簡単に識別できそうですが、森岡氏は、既に、次のように指摘しています※⁹(なお森岡氏は「亜種～」としていますが、「亜種」という言葉は削除しました。また一部引用者が補記しています)。

・**嘴** 日本で記録されている個体では下嘴基部が淡色な個体も多く、これが全てニシオジロとすると、分布域から考えて極めて不自然である。オジロビタキも巢内雛の段階では上下とも淡肉色なので、全体が黒っぽくなる時期には個体差がありえる。第1回冬羽の段階では、下嘴の基部が淡色だからニシオジロとは言えず、基部が淡色なオジロビタキもいるのではないか。

・**上尾筒** 日本に渡来する個体では上尾筒がジェット・ブラックから暗灰褐色の個体まで様々で、褪色している場合もある。よって明確に上尾筒がジェット・ブラックならオジロビタキとはいえるが、ジェット・ブラックでないからニシオジロである、とはいえない(褪色したオジロビタキもありうる)。

さて、今回調べながら感じたのは、ヨーロッパの図鑑は、典型的なタイプの識別点を記載しているだけで、そもそもオジロビタキの第1回冬羽の個体差等を調べたうえでの記載ではないようでした(例えば「すごく似ていて、♂成鳥以外はおそらく容易に識別できない」と書いています※¹⁰)。

一方日本には、そのよく分からないニシオジロとオジロビタキの第1回冬羽が渡来し、その中には、たぶん「ニシオジロ的なオジロビタキ」も多いと思われます。そのためヨーロッパ図鑑の典型的な特徴を基準にすると、分布域から離れるニシオジロが異常に多くなってしまいます。一方、渡来する個体を中心に考えると、ニシオジロとニシオジロ的オジロビタキとオジロビタキが混在しているため、結局よく分からない、となってしまうようです。

日本は越冬域ですので、どうしても2種が混在し、詳しく調べるのは困難です。本来こうした場合は、オジロビタキの繁殖地であるロシアでの知見が重要となりますが、そうした資料は見つけ出せませんでした。

じゃあどうするの？

研究者はともかく、各人がどうとらえるか、と思います。大西氏の整理した表にしたがい、単純に識別するか。しかし実際に過去の複数個体の写真を見ましたが、両種の特徴が混在する個体はかなり多いようです。

もしくは森岡氏の見解をふまえ、典型的なニシオジロとオジロビタキのみを識別し、中間的な個体は「不明」とか「ニシオジロ？」などとするか。ただこうした判断をするには、各識別点について、どのような個体差があるかを知っておかなければなりません。これはかなり難しい話です。

いずれにしても、せっかく「謎」を持っている種です。少なくとも、皆が「オジロ」と言っているからオジロ、「ニシオジロ」と言っているからニシオジロといった、安易な受け売りは避けたいものです。

1 吉田和人,1999.阿波の野鳥(株)教育出版センター

2 高知新聞社,1995.四国の野鳥.

3 四国新聞社,編集協力:(財)日本野鳥の会香川県支部,1996. 香川の野鳥ウォッチングガイド

4 埴淵謙一,1994.6.「最近何か出てますか?」(オジロビタキ).BIRDER

5 白井せつ子,2000. 鳥便り(オジロビタキ), かいづり(192)2000年1月号、日本野鳥の会香川県支部

6 木谷重信,2006. かいづり(表紙), かいづり(267)2006年4月号、日本野鳥の会香川県支部

7 茂田良光,2008.5.オジロビタキの分類、最新情報!.BIRDER

8 大西敏一,「オジロビタキの謎 ニシとヒガシ.BIRDER

9 森岡照明,1998.12.新しい識別の試み 第17回 オジロビタキ.BIRDER

10 M.Beaman&S.Madge,1998.The Handbook of Bird Identification for Europe and the Western Palearctic